



「ふむふむ」

と、神さまは、雲の上から下界を見おろして、白いあごひげをなでおろした。

いつもとかわらない、平和な朝の風景だ。

空は、はれやかにすみわたり、山々は、もみじ色にかがやいている。

木々には、赤やオレンジ色の実がたわわにみのり、地面いっばいに黄金色。コメの収穫もまちかである。

すべて、地上は、こともなし。

スズメは、チュンチュンとつつましやかに鳴き、万物の創造主である神さまは、満ちたりた大息をもらした。

ふと、視界をカラスがよぎる。

「カア、カア、カア」

「むむむむむ」

と、神さまは、白くて長いあごひげをぎゅっとにぎった。

「いくぶん、品位にかける鳴き声だ」

これは、いつも感じることであって、きょうが、とくべつひどいというわけではない。

しかし、一点、感じた不安な思いは、朝の満ちたりたうれしさにポトンと黒いシミを落とした。そう、カラスの羽の色のような。

そわそわと、神さまは、白くて長いあごひげで三つ編み